

## 英国研修旅行雑感Ⅱ

道上正邦

## 1 はじめに

平成29年2月7日、欧州連合(EU)創設を定めたマーストリヒト条約が調印されてから25周年を迎えたと報じられました。しかるに、EU内では移民の流入等多くの課題に直面しており、各加盟国の統合を進める速度差が徐々に拡大し、変質してきているようにも感じられます。門外漢ではありますが、今まさに21世紀の大きな潮目にさしかかり、ナショナリズム志向へ舵がきられつつあるような錯覚を覚えます。もっとも、そのきっかけとなったのは、「英国のEU離脱」であり、また、米国のトランプ大統領の登場も然り、あるいは、一部EU加盟国の右派台頭の潮流なのでしょうか。

そこで、数年前の公益財団法人 三笠保存会主催の「三笠生誕の地を巡る旅」(表1参照)を改めて思い起こし、EU離脱前の当時の英国事情について振り返ってみることにしました。

表 1 三笠生誕の地を巡る旅(旅程)

月日	地名	行程			
平成24年 11月7日 (水)	東京(成田)発:1155  ロンドン着:1530	ヴァージニアアトランティック航空901便にてロンドンへ(直行便)  <ロンドン泊>			
11月8日 (木)	ロンドン (ユーストン駅) バロー・イン・ファーネス	列車(0730発:ランカスター乗換:1117着)  バロー・イン・ファーネス市見学:BAEシステムズ・ドック博物館・東郷元帥の記念品がある市役所・ミカサストリート  <ウィンダミア泊>			
11月9日 (金)	バロー・イン・ファーネス  ロンドン (ユーストン駅)	列車(0850発:オクセンホルム乗換:1212着)  ロンドン市見学:グリニッジ海事博物館・旧王立海軍大学(現グリニッジ大学)・帆船カティサーク号・ロンドン塔・バッキンガム宮殿・ウェストミンスター寺院等  <ロンドン泊>			
11月10日 (土)	ロンドン ポーツマス	バス(往路:3時間) ポーツマス見学:HMSヴィクトリー号・ポーツマスヒストリックヤード等	11月11日 (日)		ロンドン発:1200  ヴァージニアアトランティック航空900便にて成田へ(直行便)  <機内泊>
	ロンドン	バス(復路:3時間)  <ロンドン泊>	11月12日 (月)		東京(成田)着:0900

## 2 戦艦「三笠」生誕の地:バロー・イン・ファーネス

ロンドン(ユーストン駅)から特急列車で約3時間半、羊の放牧地域、湿地帯が連なる一帯を通り、西海岸のピーターラビットの世界を想像させる湖水地方(ウィンダミア)の南、モアキャンプ湾を臨む町、そこが「バロー・イン・ファーネス」です。ここは、古くから鉄鋼、造船所の町と知られ英国海軍の戦艦を数多く建造した、ビッカース社(現:BAEシステムズ社)をはじめとし、数多くの装備品製造企業もあり、現在もその流れを継ぐ工場が連なる工業都市です。

首長を表敬訪問したタウンホールは、1887年に開設された歴史の重みを感じさせる赤レンガの現代ゴシック調建築(写真①)です。エントランスから入ると彩り深いステンドグラスをふんだんに施した光窓、初代首長をはじめ数々の肖像画、アンティークな調度品、古美術品等、タイムスリップしたような不思議な感覚にとらわれました。産業革命以来、世界を常にリードし、歴史に裏付けられた荘厳さ、偉大さ、威容、気品、重厚、自信等の感覚がうかがえ、まさに栄華を極めた英国の力を肌で感じた次第です。

また、当ホールの首長執務室には東郷平八郎元帥が英国に寄贈した絵鉢(写真②)も展示されていまし

た。これは、1911年6月に英国王ジョージ5世戴冠式への日本国代表として出席の際にこの町を訪問し、戦艦「三笠」建造の御礼として贈呈されたとの紹介がありました。もっとも、東郷元帥自身、1871～1878年の7年間、英国海軍への官費留学生に選ばれウースター商船学校への留学経験もあることから個人的にも英国に深く関わっていたことがうかがえます。



写真① バロー・イン・ファーネス庁舎



写真② 東郷元帥寄贈の絵鉢

ことごとくかように、海軍創設以来、同じ海洋国家として英国海軍を日本海軍の手本とし歴史的に長く又深く関わり相互の関係醸成に努めてきたことをはっきり感じ取ることができました。

### 3 戦艦「三笠」の建造所:ビッカース社

日本海軍の創成期、艦船建造は海外に委ねており、表2のとおり、英国の造船所に戦艦(巡洋戦艦を含む。)を9隻、その内、ビッカース社には、「三笠」、「香取」及び「金剛」の3隻が発注されています。

なお、「日本海軍艦艇及び同装備主機関一覧」(村田 駿 平成6年12月3日 防衛研究所蔵書)によりますと、日本海軍は、海軍工廠或いは民間造船所に先駆けて、戦艦の他、巡洋艦11隻、駆逐艦17隻等を英国の数社造船所に発注していることから、あらためて「海軍艦建の原点は、英国にあり。」ということが出来ます。

表2 英国造船所へ発注の戦艦(巡洋戦艦を含む。)

艦名	建造計画 (根拠)	艦歴 (年月日)				建造所	備考
		起工	進水	竣工	除籍		
富士	第8回拡張案 (明治25年第4議会)	1894/8/1	1896/3/31	1897/8/17	1945/11/30	英国 THAMES	1912/8/28 1等海防艦に編入
八島	第8回拡張案 (明治25年第4議会)	1894/12/28	1896/2/28	1897/9/9	1904/5/15 (沈没)	英国 ARMSTRONG	旅順港外で触雷沈没
敷島	第2期拡張案 (明治29年第10議会)	1897/3/29	1898/11/1	1900/1/26	1945/11/30	英国 THAMES	1921/9/1 1等海防艦に編入
朝日	第2期拡張案 (明治29年第10議会)	1897/8/18	1899/3/13	1900/7/31	1942/5/25 (沈没)	英国 JOHN BROWN	米潜水艦サーモンの雷撃により沈没
初瀬	第2期拡張案 (明治29年第10議会)	1898/1/8	1899/6/27	1901/1/28	1904/5/15 (沈没)	英国 ARMSTRONG	旅順港外で触雷沈没
三笠	第2期拡張案 (明治29年第10議会)	1899/1/24	1900/11/8	1902/3/1	1923/9/20	英国 VICKERS	1921/9/1 1等海防艦に編入
香取	第3期拡張案 (明治35年10月27日)	1904/4/27	1905/7/4	1906/5/20	1923/9/20	英国 VICKERS	1923/9/20 ワシントン条約に基づき破棄
鹿島	第3期拡張案 (明治35年10月27日)	1904/2/29	1905/3/22	1906/5/23	1923/9/20	英国 ARMSTRONG	1923/9/20 ワシントン条約に基づき破棄
金剛	伊号装甲巡洋艦 (明治39年第23議会)	1911/1/17	1911/5/18	1913/8/16	1944/11/21 (沈没)	英国 VICKERS	1912/8/28 巡洋戦艦に類別 基隆北西にて米潜雷撃により沈没

(「日本海軍 艦艇及び同装備主機関一覧」から抜粋)



BAEシステムズ社に到着後、ビジターIDカードの手続き、コンファレンスルームへ入室、会社関係者との昼食会の後、会社概要のプレゼンテーションを受け、工場施設見学をさせていただきました。そのプレゼンの冒頭、原子力潜水艦の建造を担っていることから、原子力事故に対する会社としての安全管理、従業員・見学者の行動基準(シェルターへの通路誘導、ヨウ素剤の配布要領等)についてDVDによる説明を受けました。また、会社内にカメラ、携帯電話等の持ち込みが禁止されたため、撮影は、全て会社側の特定の撮影者の手による集合写真のみであり、見学者に対する厳格なセキュリティー管理がうかがえました。

なお、説明資料によりますと、最初の艦船建造は、1886年にトルコ海軍向けのものとのことでしたが、やや遅れ、先のとおり、1898年に日本海軍は戦艦「三笠」の建造を発注し、1899年起工、1900年進水、1902年3月に日本海軍に引き渡されました。また、英国海軍が納入した、どの戦艦をも凌ぐ、最大速力(18ノット以上)と武器装備能力(無線電信機、測距儀等)及び強度が15%強化されたKC(クルップ)鋼を装甲に使用する等、当時最先端の戦艦であったとのことでした。これは、当時の日本近隣諸国(ロシア等)とのクリティカルな国際情勢における切実なる覚悟が最先端技術を志向した、あるべき艦(ふね)造りをさせたような気がします。

ツアー参加者は、まさに、112年前の1900年11月8日に進水した船台跡に立ち、時を越えていろいろな思いをもって見学しており、特に、近親者(祖父等)が戦艦「金剛」建造に関わる等、深く縁のある参加者は、手に親族の写真を掲げ記念撮影に臨み、また、亡き祖父から幼少時に聞いた話の記憶を重ねながら船台跡を感慨深く見つめ涙する姿にその激しい感情の高まりを感じざるを得ませんでした。



写真③ 戦艦「三笠」進水の模様(1900.11.8)



写真④ 船台跡にて(2012.11.8)

さて、BAEシステムズ社は、ビッカース社とマルコーニ社が統合されできた会社です。説明によれば、以前は、水上艦の建造を手掛けていましたが、近年は、潜水艦建造に特化しており、最新モデルであるアシュート型原子力潜水艦(全長90m、乗員98名)を現在まで7隻建造しているとのこと、また、基本的に2年毎に英国海軍から発注を受け、1隻建造に9年半をかけて建造しているとのこと。日本の潜水艦建造に比べ、約2倍の期間を要しており、原子力推進の艤装、試験等で安全性を最大限確保する必要性からかと想像でき、さらに、長納期であることから、英国海軍が行う、装備品等の予算要求、調達方法、調達時期に何か工夫があるものと推察します。これも、最近耳にする長期間に対応する「一括契約方式」/「PBL」の成せる業なのかもしれません。

いよいよ潜水艦の建造工場の見学です。このブロック製造・組立工場の大きさは、全長260m×幅50m×高さ56mの規模で、日本の潜水艦建造施設よりもかなり長さが高さが大きい印象を受けました。また、工場

に隣接している、ドック博物館のカタログによりますと、この施設は、1980年代のサッチャー首相の時代にトライデント型原子力潜水艦の建造のために建てられたもので、爾来、「The Trident Shed(格納庫)」又は「Maggie's Farm(施設)」として知られているとの記述がありました。

このようなサッチャー首相の国家安全保障への取り組み、特に海洋国家として海軍に対する積極的な施策は、1982年のフォークランド紛争によるものと推察できます。その際、サッチャー首相はアルゼンチン軍のフォークランド諸島への侵略に対し、間髪を入れず、艦隊及び爆撃機をフォークランドへ急行させことを記憶しています。また、仏製エグゾセミサイルによって英国海軍の駆逐艦「シェフィールド」が撃沈され、20名の犠牲者を出したことも、危機感、スピード感を持って適時具体的に対処する覚悟ができた大きな衝撃的事件であったものと想像します。

余談になりますが、駆逐艦のアルミニウム構造も可燃性／延焼性について戦火の中で確認された実証例ともなり構造部材、装備品の難燃化に拍車がかかった教訓の紛争でもありました。



写真⑤ BAEシステムズ社潜水艦建造工場



写真⑥ グループ工場見学にて

#### 4 英国海軍所蔵の歴史的資料

##### (1) ヒストリック・ドックヤード

ロンドンの中心部からポーツマスに向け南西に高速バスで約3時間、ヒストリック・ドックヤードを訪問しました。図2の案内図にあるように、まず、目に飛び込んだのは、帆船の HMS「ウァリアー」②で、本船は、



図 2 ヒストリック・ドックヤード案内図

蒸気と帆を使う世界で初めての鉄製船体の戦闘艦とのことでした。エントランスから入り、英国海洋博物館⑩、HMS「ヴィクトリー」⑫へ足早に進んでいきました。私自身、39年前の遠洋航海の折にポーツマスに入港し、見学した HMS「ヴィクトリー」でありましたが、これほどまで洗練され、観光化した施設を目の当たりにし驚きを隠すことができませんでした。記念艦「三笠」と違い、HMS「ヴィクトリー」は、「HMS」とりまますように、現在も英国海軍の管理下に置かれ、その運用は海軍軍人に委ねられていることから、英国海軍の広報を担ったものとなっています。また、ポーツマス市とタイアップした観光化に物心両面の支援がされているようで、国民の海軍に対する理解が最大限浸透し、自ずと醸成していく環境にあることがうかがえました。一方、記念艦「三笠」の運営自体は、公益財団法人三笠保存会が一元的に実施されている現状を見ると、歴史的遺産が旧海軍のよき伝統を受け継いだ海上自衛隊は切り離され、歪んだ状況にあるのではと感じざるを得ず複雑な思いで HMS「ヴィクトリー」を下艦したことを思い出します。





写真⑦ HMS「ヴィクトリー」

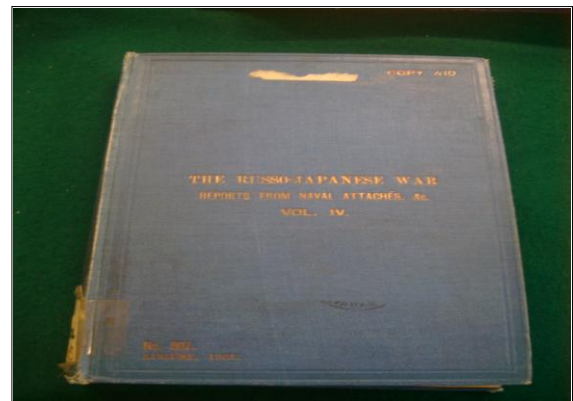
## (2) 英国海軍図書館

HMS「ヴィクトリー」の見学を終えて、歴史資料が所蔵されている赤レンガ造りの海軍図書館に案内されました。その部屋は、ポーツマスに縁のある各国海軍の歴史的資料の数々が所蔵されておりました。既に、図書館スタッフによって戦艦「三笠」等の日本海軍に関わる建造資料(建造工程中の写真・図面、装備品の構造・特性及び運用マニュアル等)、日露戦争時の戦況概要等が机上に抽出、閲覧できる状態にされており、「この資料は見たことがない！」と驚きの喚声を上げつつ蔵書に見入っていました。

特に、印象深い資料は、「戦艦「三笠」建造の様相」及び「日露戦争レポート(1907年発行)」です。前者については、当時の艦建技術・要領を確認することができ、写真③及び写真⑧のとおり、船体部分の完成後、進水、入渠し、マスト等の艤装を行う方法をとっていることが見て取れました。また、後者については、日露戦争、日本海海戦の折に戦艦「三笠」に英国海軍武官が乗艦し、つぶさに戦況を記し、人的被害の状況の写真を含めレポート(写真⑨)にまとめており、以後あらゆるジャンルの教訓を得るための貴重な分析資料として100年以上の所蔵保管に感動すると共に、あたかも日本海海戦に時空を超え、その場に居るような錯覚を覚えるまでも夢中で読みふけていたように記憶しています。



写真⑧ 戦艦「三笠」建造中の模様



写真⑨ 日露戦争レポート(1907年発行)

## 5 当世英国事情

英国では、例年11月10日・11日に国を挙げて第1次世界大戦、第2次世界大戦、フォークランド紛争及びイラク戦争等の戦没者追悼行事が行われています。役所等公的機関、スーパー、売店等に募金箱と共に「赤いポピーの花を象った紙製の胸飾り」を配布し、国を挙げて哀悼の意識を高揚させる取り組みをされています。私も戦艦「三笠」に因む「ミカサ・ストリート」にある、小さな郵便局で一つ手にし、英国出国まで上着の襟につけ哀悼の誠を捧げた次第です。さかのぼれば、英国は、中世期に「百年戦争」と言われる欧州内での群雄割拠が続いた厳しい体験が後世に引き継がれ、国家存続、国体の維持がいかに大切かを

国民が強く意識し、第1次世界大戦以降の近代の戦争・紛争に囚らずもその命を国に捧げた軍人等犠牲者に対し哀悼の誠を表すことが醸成される環境にあるように強く感じ、また、11月11日当日には英国出国の間際ではありましたが、伝統的な礼装を纏った衛兵によるバグパイプの演奏の中エリザベス女王が出席



されて厳かに儀式が執り行われている様子をヒースロー空港のテレビで幸運にも見ることができ感慨深く見入った記憶が蘇ります。話が前後しますが、ロンドンからパロー・イン・ファーネスに向う特急列車の車窓から原子力発電所らしき施設を2箇所見ることができました。周知のとおり、英国は原子力エネルギーを有効に活用し、一般家庭のみならず、英国海軍のビークルにも採用している国です。産業革命に早くから取り組んだ本家本元であり、科学技術を基盤として国家国民を繁栄させることを唯一の柱としている国です。

当時、英国は、米国発のリーマンショック、構造的不況による失業率の上昇、若年者の雇用閉塞による経済・社会的な不安材料ばかりで、訪問前から「英国、国民は元気がないのでは？」と懸念しておりました。しかしながら、研修中の地元添乗員からの話、接遇いただいた英国人(軍人を含む。)の言動、商業施設の動静、車・人の往来等からは経済的な深刻さはないように感じられました。

また、研修の最終日の夕刻、デパートの「ハローズ」に立ち寄った際(これはアラブ首長国連邦のオイルマネーで建てられたとのことです。)、各階エスカレーターに乗って見える天井、手摺にはアラビア彫刻又は絵画等が飾られ、相当な資金が投入されているように感じ、アラブ系の富裕層らしき姿が非常に目に付いたことを強く記憶しています。

なお、短期間且つ地域限定の訪問のため、確信までには至りませんでした。研修イベント及び列車・バス移動の車窓から眺めた公共・工業施設及び生活風景から、中心都市部、郊外都市部及び農村部の三者の経済格差が少なからず見え隠れし、特に、中心都市部は、人種的なミックスサラダの様相を呈しており、中東産油国及び中国系企業の進出が認められ、著しく違和感を覚えたことを記憶しています。

## 6 おわりに

平成24年11月、「三笠生誕の地を巡る旅」に参加し、非常にタイトなスケジュールながら、戦艦「三笠」の建造造船所訪問だけでなく、英国或いは英国海軍とも縁(ゆかり)のある施設を訪問できたことに対し公益財団法人三笠保存会殿に心から感謝を申し上げたいと思います。

研修旅行を通して英国国家・国民の歴史に対する畏敬の念、安全保障に対する常識的な価値観、欧州のリーダー国としての強い責任感、歴史・文化を次世代に繋ぐ産・官・学の連携を感じた次第です。また、歴史に根付いた重厚さ、気高さ、強さをも肌で感じ得たと同時に研修を通じてUE離脱の兆候は全く感じられない状況であったことを付け加えておきます。

さて、先のとおり、日本海軍は、発足当初から海洋国家である英国の海軍に師事し、良き伝統を繋ぎつつ、戦後、海上自衛隊として再編され現在に至っています。日露戦争前の期間(約10年)に戦艦「三笠」等の建造を英国造船所に発注し、「世界一の性能を持つ戦艦」を志向し、艦(ふね)造りに対し技術的妥協がなかったことが各種戦術(操艦・占位・砲術等)の採用及び日夜の訓練と共に日本海海戦を勝利に導いたことは間違いありません。昨今の周辺国の各種挑発事案(領海侵犯、弾道ミサイル発射等)がエスカレートする中、今後10年を念頭に「世界一の性能をもつ護衛艦」を志向し、また技術的進歩を決して止めることなく、陳腐化したシステムに妥協せず、「いい艦(ふね)を造ってほしい。」と切に願うものです。

本稿は、個人的な体験に基づくもので、客観的事実と異なる部分が多少あるかと思いますが、ご容赦いただければ幸いです。

以上